冷泉家時雨亭文庫蔵『中宮亮重家歌合』の本文について

安井重雄

はじめに

『中宮亮重家歌合』[1]（以下『重家歌合』と略す）は、六条藤家顕輔男重家が主催し永万二年（一一六六）四月六日～八月二十七日の間に催行されたと考えられる歌合で、歌題は花・郭公・月・雪・恋の五題、各題十四番、計七十番の規模を持つ。出詠歌人は左方・右方それぞれ十四名、計二十八名。結番は、合手、披講順ともに各題固定されている。判者は俊成（当時は顕広、なお出詠はしていない）。当該歌合は、その出詠歌よりも判詞に見える俊成の歌論的言辞が注目されてきており、たとえば、「左、風体は幽玄、詞義非凡俗」（花二番）、「白氏文集、古万葉などは、いささかとりすぐせるにとがなきにやあらむ」（花五番）、「右歌、偏効万葉之歌風、頗背中古之妙体也」[2]（雪八番）（新編国歌大観本に拠った）などといった評が著名である。俊成は、この二年前長寛二年（一一六四）八月十五日歌林苑歌合に初めて判者を務めたことが知られているが[3]、証本は散佚しており、証本が残る俊成判歌合としては当該『重家歌合』が最も古い。

このように当該歌合は俊成研究にとって重要な資料であるが、本文には問題を抱えている。それは成立期に近い伝本はもとより中世に遡る写本がなく、伝本としては近世の写本と刊本歌合部類所収本、群書類従本が知られるに過ぎないことによる。同じ平安末期の俊成判歌合のうち、嘉応二年（一一七〇）『住吉社歌合』には成立期に近い伝寂蓮筆切とそれを裁断前にほぼ正確に臨写した中院通村筆本が伝存し[4]、承安二年（一一七二）『広田社歌合』には俊成自筆本及び出詠者の一人実房筆本（『愚昧記』紙背で欠損箇所が多い）が伝存する[5]ことと比較すると、『重家歌合』は伝本に恵まれない。一般に利用されている活字本では、『平安朝歌合大成　増補新訂』（以下『歌合大成』と略す）『新編国歌大観』とも

に内閣文庫本（二〇一―一一二）を底本としながら不審箇所を諸本によって校訂している。

ところが、冷泉家時雨亭文庫から中世に遡る伝本が出現し、影印が刊行された[6]。同本は、『法住寺殿歌合（建春門院北面歌合）』とともに合写された袋綴一冊で、将軍足利義政・義尚の奉公衆であった玄就（武田持明）筆、奥書から文明十三年（一四八一）三月中旬、玄就七十歳の折の書写と認められる。薄手の消息の紙背を用いているが、表の墨筆の滲みが裏まで通って判読に影響する箇所や、料紙に穴の空いた欠損箇所もあり、そこを避けて書写するなど、装丁も書写も決して美麗とはいえない本である。また、従来の諸本が歌題ごとに一番～十四番の番数を記すのに対し、時雨亭文庫本は冒頭から末尾まで一番～七十番の通し番数を記す。当該歌合の最古写本が出現したことにより、従来の本文の不審箇所を訂正できる可能性が想定されよう。そこで、本稿では、時雨亭文庫本がどのような性格を持った本文であるかについて考察したい。

なお考察にあたり、時雨亭文庫本と比較した伝本四本と古筆断簡一種を次に掲げる（伝本名の下に本稿における略称を示す）。

時雨亭文庫本＝冷

内閣文庫本（二〇一・一一二）＝内A（先述したように、『歌合大成』『新編国歌大観』の底本）

肥前松平文庫本（一三八・三五）＝松

歌合部類版本＝部

群書類従本＝群

若狭切＝若

右のうち、若狭切以外はいずれも画像データが公開されており、比較が容易である。若狭切は、伝清水谷実秋筆とされ、三葉が『歌合大成』に拾遺されている（本稿で用いる際は、写真が公開されている切はそれにより、そうでない場合は『歌合大成』翻字による）。『重家歌合』の伝本には他に、次のような写本がある。

内閣文庫本（二〇一・一二〇）＝内B

書陵部『歌合三種』（一五五・一二八）所収本＝書A

書陵部本（五〇一・五六六）＝書B

彰考館歌合部類本（巳一二）＝彰部
彰考館本（巳一三）＝彰
高松宮本（H六〇〇・三九〇）＝高（本文は内A・内Bと同系統だが、やや誤写が目立つ）
早稲田大学中村俊定文庫本（文庫一八・一〇一九）＝早（恋二番右歌以降のみ存の零本、内Aと同系統）

右のうち、内B・高・早は画像データが公開されている。書A・書B・彰・彰部は精査できておらず、部分的に校合した結果としてはいずれも内Aに近いように思われる。『歌合大成』が、「本文研究」として内A・内B・書陵部本（書Aか書Bかは未詳）・彰部・部・群を掲げて「全て宗本を一にする同一系統の伝本である」[7]と説く通りであろう（なお同書は松について、「因みに松平文庫本は未調査」と記している）。

右のように、従来知られている伝本はいずれも同系統と考えられること、また、『歌合大成』『新編国歌大観』の底本に選定されている内Aが中では優れているとされているとともに、今回校合した結果としては松も他本よりは優れた本文を持っていると考えられ、この二本に版本である部・群二種を含めた四本を時雨亭文庫本と比較すれば、当該歌合の本文状況のおおよそを示すことができると考える。

一　花二番の本文

さて、時雨亭文庫本の性格を推定するにあたって、まず花二番を取り上げたい。花二番は、先述したように判詞に「幽玄」評を持つことから、「幽玄」の意味・機能の考察のため本文の考証が重ねられてきた番である。ただし、『歌合大成』刊行以前は、内A等の写本が一般に利用される状況になく、『歌合部類』『群書類従』によって考察がなされてきた[8]。谷山茂、田中裕らの考察を経て、久保田淳が詳細な読解を示し、それを承けて山本一が先行研究を整理しながら優れた読解による本文校訂案を示している[9]。花二番はこのように考証が重ねられてきており、新出の時雨亭文庫本本文の位置を推察するのに適当な番といえよう。

まず『歌合大成』『新編国歌大観』底本である内Aの本文を掲げ、続けて山本による校訂本文、時雨亭文庫本の順に示す（山本は、仮名に漢字を宛て、句読点・「　」を付しているが、そのままに掲げる）。山本の校訂は、『新編国歌大観』本文に一致し、『歌合大成』本文とは一箇所のみ異なる（傍線部⑤）。

〈内A〉

二番

左勝　　別当隆季

うちよするいそへ①の波のしらゆふは花ちるさとのとをめなりけり

右　　三河

散ちらすおほつかなきに②はなさかり木のもとをこそすみかにはせめ

左、風躰は幽玄、調義③詞イ非凡俗、たゝし、花をしらなみ④、しらゆふなとよむはつねのことなれと、なみによせつるときはうみ、川をひき、ゆふとかけつれは、もり、やしろともいへるや、かし⑩ありてきこゆらん、花ちる里とをめならは、五百重⑤のなみをしらゆふならす⑥とも
や侍へからん、右、ふること、もをとかくひきよせられたるうちに、かの伊せのみやすところの哥は、山ちにて古郷のとくいふかしか
りけ⑦る歟なに、散ちらすきかまほしきをといへるこそことにおかしきを、この⑧もとの哥には落不落おほつかなからむことは⑨、花をおもふ心
しふかゝらすやきこゆらん、すゑに、すみかにはせめといひはてられたるほとも、余情たえ⑩すやあらん、なを、なみのしらゆふは哥の
さまたけ⑪まさりてや

〈山本校訂案〉

〔花〕二番左勝　　別当隆季

うちよする五百重①の波の白木綿は花散る里の遠目なりけり

右　　三河

散り散らずおぼつかなきに②花盛り木のもとをこそ住み家にはせめ

左、風体は幽玄、詞義③非二凡俗一、ただし、花を「白波」④「白木綿」など詠むは常の事なれど、波に寄せつる時は海・川を引き、木綿と懸けつれば森・社とも言へるや、よしありてきこゆらむ。「花散る里の遠目」ならば、「五百重⑤の波の白木綿」⑥ならずともや侍るべから

む。右、古ごとどもをとかく引き寄せられたるうちに、かの伊勢の御息所の歌は、山路にて故郷のとくいぶかしかりけるに⑦、「散り散らず聞かまほしきを」といへるこそ、ことにをかしきを、木⑧のもとの歌には、落不落おぼつかなからむ言葉⑨は、花を思ふ心し深からずやきこゆらむ。末に、「住み家にはせめ」といひ果てられたるほども、余情たらずや⑩あらむ。なほ、「波の白木綿」は、歌のさま、たけまさりてや⑪。

〈時雨亭文庫本〉

二番

左勝　　別当隆季

うちよする五百重①の浪の白ゆふは花ちる里の遠目成けり

右　　三川

ちりちらすおほつかなきは②花さかり木のもとをこそすみかにはせめ

左、風躰は幽玄、詞義③非凡俗、但、花を白木綿④（綿）なと読は常の事なれと、波によせつる時は海川をもひき、ゆふとかけつれは杜社ともいへるやよし有にきこゆらん、花散里の遠目ならは、五百重⑤の浪の白ゆふ、猶すこし⑥もや侍へからん、右、古事共をとかく引よせられたる内に、彼伊勢の御息所の哥は、山路にて故郷のとくいふかしかりける⑦に、ちりちらすきかまほしきをといへるこそ、殊にをかしきを、木⑧の本の哥には、落不落おほつかなからん事⑨は花を思ふ心し深からすや聞ゆらん、末に、すみかにせんと云はてられたる程も、餘情た⑩らすやあらん、猶、波の白ゆふは、哥さまのたち⑪まさりてや

傍線部①～⑪は、主な異同及び校訂箇所である。[11] 異同状況を内Aを底本として一覧する（「内A他」は、冷を除いて内Aを含むすべての本を示す）。

①いそへ（内A他）―五百重（冷）

②に（内A他）―は（冷）
③調（詞イ）（内A・彰部・書B）―詞（内B・高・彰・冷）、調（松・部・群）、詞調（書A）
④しらなみしらゆふ（内A他）―白木綿（綿）（冷）
⑤五百重のなみを（内A・内B・高・彰・彰部・松・書A・部）―五百重の浪の（冷）、いそへのなみの（部・群）
⑥ならすともや（内A他）―猶すこしもや（冷）
⑦けなに（内A）―けるなに（内B・高・彰）、けるなに（本のまゝ）（書A）、けなに（松）、けるに（冷）、けになに（部・群）
⑧このもとの（内A）―木の本の（彰部・書A・冷）、この（部・群）
⑨ことはゝ（内A・内B・高・彰・松）―ことはら（彰部）、詞は（書A）、事は（冷）、ことは（部・群）
⑩たえす（内A・内B・高・彰部）―たらす（松・書A・冷・部・群）
⑪たけ（内A他）―たち（冷）

①～⑪のうち、山本が指摘する従来から問題となっていた異同は①③⑤と、異同ではないが⑧の解釈である。詳細は山本論文を参照していただきたいが、時雨亭文庫本の位置を確認するため、異同について以下に説明する。

①は、時雨亭文庫本以外のすべての本が「いそへ」とする箇所で、⑤に示したように、判詞では部・群以外は「五百重」とする。『歌合大成』『新編国歌大観』は内A判詞を勘案して「五百重」と校訂するが、部・群が判詞も「いそへ」とするため、岩波文庫本『歌合集』などは「いそべ（磯辺）」とし、谷山・田中は「いそべ」の本文によって論じている。[12] 磯辺でも意味は通じるが、久保田が「五百重波」は「『万葉集』にしばしば見出されるものであり」「『磯辺の波』ならば、岩がちの海岸に白く砕ける波のことである。「五百重の波」とは、幾重にも重なって寄せる波浪を意味する。その視覚的イメージは相当隔たりがある」と『万葉集』との関係と両者の表現効果に差違があることを指摘し、「判者俊成によるこの一首の解釈・鑑賞の結果記された、「幽玄」の語を含む前掲の判詞」からみて、「五百重」が相応しいと論じ、山本は久保田の指摘を更に補強している。[13]

さて時雨亭文庫本は、左歌第二句に「五百重」の本文を持つ唯一の伝本ということになる。しかも中世期の写本でもあり、久保田・山本の読

解・考証の正しさを証するとともに、時雨亭文庫本が成立時に遡る本文を有している可能性を示している箇所といえよう。

③は、「詞」か「調」かが論じられてきた箇所で、岩波文庫『歌合集』は、「風體は幽玄調、義非二凡俗一」と翻字する。谷山は岩波文庫本と同じ形で本文を引用しながら「内閣文庫本等に「風体は幽玄、詞義非凡俗」とあるのに従うべきか」[14]と述べる。現在は、「調」を支持する論はなく、時雨亭文庫本もやはり「詞」である。

⑤は、「五百重の波を」か「五百重の波の」かの異同である。内A以下の写本は前者、部・群の版本のみが後者であった。『歌合大成』、久保田は校訂せずに前者を採るのに対し、『新編国歌大観』、山本は校訂して後者を採る。この異同は、左歌の解釈（比喩のあり様）に関わると考えられ、久保田は「そこには花を白波に見立て、更に白波を白木綿に喩えるという、二重の見立てがなされている」と「二重の見立て」と解するのに対し、山本は「「波の白木綿」はすでにひとまとまりの和歌表現として定着していたと見られるので、俊成が問題にしたのは、もっぱら「波の白木綿」対「花散る里の遠目」の比喩関係であると見てよいと思われる」と論じる。久保田の読解は、判詞の「花をしらなみ、しらゆふなどよむ」「五百重のなみをしらゆふならずともや侍べからん」（内Aによる）の箇所について、「花を白波に見立て、それを白木綿に見立てる」「（花を波に見立てた）五百重の波を更に白木綿に見立てなくともよいであろう」の意に解したものと思われる。これは、「五百重のなみを」とする本文に基づいた解釈であろう。やはり詳細は久保田論文・山本論文を参照していただきたいが[15]、時雨亭文庫本が「五百重の浪の」とあることにより、「の」は部・群の江戸期における校訂と見る必要はなくなったので、稿者としては山本の理解でよいのではないかと考える。

⑧は、部・群が「もとの（本の）」を脱するだけであるが、右歌が本歌とした判詞に引用する伊勢歌を「この本の歌」という言い方で指すか、それとも木の根元を意味するか、解釈が分かれる箇所である。したがって「この」に「木の」と宛てるか否かは重要になる。ここも山本の整理に詳しいが、久保田は「この本の歌」、山本は「木のもとの歌」と解する。時雨亭文庫本は「木の」と宛てる。稿者も「木の」でよいのではないかと考える。

他に、時雨亭文庫本の優秀性がわかる箇所に、⑦がある。現在は内A「けなに（る歟）」の傍記と諸本から「いぶかしかりけるに、ちりちらず……」と校訂して読まれているが、かつては部・群を底本として「いぶかしかり。げになに散り散らず……」（岩波文庫）と読まれてもいた。ここも、時雨亭文庫本の出現で校訂することなく読解可能となる。

また、時雨亭文庫本の独自異文である⑪にも注目したい。「風体は幽玄」と評した左歌について、判詞末尾で第三句「波の白木綿」を取り上げて「たけまさりてや」と評価して左勝と判定する箇所である。従来、異同はない箇所で、谷山・田中・久保田・山本ともに「幽玄」と「たけ」の関連から注意している。田中は、「「波の白ゆふ」の一句によつて（措辞としては難が付けられてゐる。判詞本文は省略）一首のさまは「たけ」において優れてゐるといふのであり、すでに幽玄とされた様態について別に審美論的視点から下された評価である」と解する[16]。久保田は「田中氏の解説は分析的で、説得力を有すると考える」とし、「更にこの一首における風景が、乃至は映像の重層が先の基俊の語（安井注―『中宮亮顕輔家歌合』「紅葉」基俊判）を借りれば「古質の体」に擬した詞によって喚起されること」の結果が「歌のさま、たけまさりてや」[17]であると論じる。山本は、「最終判定において勝因とされた「たけ」の高さは、古典的品格を指し、その点でやはり「凡俗」と対立するのである。「たけまさりてや」は、いちおう左歌が達成している表現についての評であり、先の「風体は幽玄、詞義は凡俗にあらず」はむしろ表現上の志向に対する評であったとはいえ、いずれも、万葉の古歌に近づこうとして当代的平俗性からいくらかなりと離れ得ている左歌の性格について、言われているのである[18]」と論じる。このように、「たけまさりてや」は、左歌についての「風体は幽玄」を「たけ」という別の観点から評したと理解される、最終的な判定を述べる重要な箇所である。

時雨亭文庫本は「猶、波の白ゆふは、哥さまのたちまさりてや」とあり、「たち」は「波」との縁語を構成し、「まさりてや」を強調した接頭語となる。時雨亭文庫本では、当該歌合における俊成の「幽玄」用例と「たけ」との関連を消滅させることになるのだが、稿者は「たち」であった可能性が高いと考える。その理由は、俊成が判詞末尾に同様の縁語的構成を取ることが多いからである。左にいくつか掲げる。

「右のあまの河なみ、すこしはたちまさるにや侍らむ」（治承二年別雷社歌合・花四番）

「なほ、みどりを分くるおきつしらなみ、はたちまさりて侍る」（治承三年右大臣家歌合・霞二番）

「左の、山こす浪こそは、たちまさり侍らめ」（六百番歌合・寄山恋・五番）

「左の志がの浦の浪の色殊に身にしむ心地していにしへの跡なほたちまさるべくや侍らん」（慈鎮和尚自歌合・大比叡二番）

このように俊成は、「波」を使用する和歌を勝と判定した際に、末尾に「たちまさる」と記す例が多いのである。『重家歌合』のこの判詞も同様であったのではなかろうか。独自異文ではあるが、「たち」が原型であったと考えたい。

さて、他に、時雨亭文庫本は②④⑥といった独自異文を持っている。注（11）にも右以外に二箇所の独自異文を示したが、②④⑥については、時雨亭文庫本（あるいはその祖本）の誤写であろうと考える。②は、「ちりちらずおぼつかなきは」では下句とうまく繋がらない。④は、諸本「花をしらなみ、しらゆふなどよむは」とあるところ、時雨亭文庫本が「しらなみ」を欠くのだが、直後に記す「波によせつる時は海川をもひき」は、「しらなみ」を受けて、花を「白波」に喩える際には海や川を歌中に置くことが必要だとする文脈なので、時雨亭文庫本が「しらなみ」を欠落したと考えるべきであろう。⑥は、時雨亭文庫本が「花散里の遠目ならは、五百重の浪の白ゆふ、猶すこしもや侍へからん」とあり、他本は「花ちる里とをめならは、五百重のなみ〔の〕しらゆふならすともや侍へからん」（内Aによるが、「を」を「の」に校訂）とある、上句と下句との比喩の不調和を指摘する文脈である。時雨亭文庫本は、花散る里を遠目に望めば、五百重の波の白木綿がやはり少しあるでしょうか、といった意味となるが、これでは通じない。誤写と考えたい。

以上、特に久保田・山本の研究成果に拠りながら、時雨亭文庫本の本文の位置付けを考えてみた。その結果、時雨亭文庫本は従来知られていない成立時に遡る可能性のある本文を有するものの、誤写や欠脱かと考えられる箇所も併せ持つ本ということになろう。

二　時雨亭文庫本と若狭切

前節に示したように、時雨亭文庫本には独自異文が多く、また欠脱かと考えられる箇所も見受けられた。本節では若狭切の本文との関係について考えてみたい。若狭切は、時雨亭文庫本と同じく室町時代写とされ、前述したように『歌合大成』に三葉が集成されている。その三葉は、花十三番・判詞末尾～花十四番左歌、月十二番・判詞末尾～月十三番・左右歌、月十四番右歌～判詞途中まで、である。その本文を以下に示し、冷・内A・松・部・群との異同をすべて掲げてみる（漢字・仮名の別は省略）。

〈花十三番〉

春の夜のやみをあやなくきこえ[*1]姿おかし右はいかにそやいひおほせられぬ所あれ[*2]と花をおもへる心ふかし又持と申へし

十四番

左　　阿闍梨心覚

吉野山花のさかりをみわたせはたゝ春の日に消ぬ白雪

＊1春の夜のやみをあやなくきこえ姿おかし（若）―春のやみをあやなく聞え姿をかしく（冷）、はるの夜のやみをあやなくきこゆれと哥のすがたおかし（内A・松・部）、はるのよのやみをあやなくきこゆれと哥すかたおかし（群）

＊2あれと（若・内A・松・部・群）―ありと（冷）

〈月十二番・十三番〉

すらむ月もあかきなりけり[*3]と猶[*4]かやうの事はよく用意すへき事也左はいつる月をみる[*5]に入事の惜[*6]からむことなとかはとおほゆれは左の勝と申[*7]へし

十三番（若）

左　　成仲宿禰

たちかへり天の河なみあらへはやなかるゝ月のくまなかるらむ

右勝　　政平

いつもかくそらに在明の月ならはあかて入夜の物はおもはし

＊3なりけりと（若・冷）―なりけりなともをろかにきこゆふるき哥にはとき〳〵よめれと（内A・松・部・群）

＊4猶かやうの事は（若）―猶か様事は（冷）、なをかやうのことは（内A・松）、なをかやうの詞は（部・群）

＊5みるに（若・冷）―見んに（内A・松・部・群）

＊6惜からむことなとかはと（若）―惜からんとなとかはと（冷）、おほえむもなとかはとも（内A・松・部）、おほえんもなとかはと（群）

＊7申へし（若・冷）―すへし（内A・松・部・群）

〈月十四番〉

右　　俊恵

かきくもるおりこそあらめ[*8]月かけははるゝにつけて物　そかなしき

左哥あはれそにたるな[*9]といへる姿いひしりておかしくきこゆ但さやけさ[*10]はひるにかはらぬとよまれたるひる[*11]をはさやけしとや[*12]申覧此さやけしといふ事は古語にもいへる[*13]は神楽のはしめよりをこれる事とそみえたる群神[*14]歌舞し給し時あはれあな面白あなさやけな[*15]とうたひし詞也されはひるもいふへきやう[*16]にはきこゆれとさやけとは竹の葉の声なりとそいへるす[*17]ゝしけなる心なる

＊8あらめ（若・内A・松・部・群）―あらは（冷）
＊9なと（若・冷）―なんと（内A・松・部・群）
＊10さやけさ（若・冷・内A・松・群）―さやけき（部）
＊11ひるをは（若・冷）―ひるを（内A・松・部・群）
＊12とや（若・冷）―とやは（内A・松・部・群）
＊13にも（若・冷）―に（内A・松・部・群）
＊14群神歌舞し（若・冷）―群神の歌舞（内A・松）、群神の歌舞し（部・群）
＊15なと（若・冷）―なんと（内A・松・部・群）
＊16いふへき（若・冷）―いひつへき（内A・松・部・群）
＊17すゝしけなる（若・冷・群）―すゝしけある（内A・松・部）

以上に示したように、若狭切と時雨亭文庫本の本文はかなりの程度一致する（但し、先述したように、時雨亭文庫本は番数を一番～七十番まで通して記すが、若狭切は他の諸本と同じく題ごとに番数を記すとみられる）。両本の相違箇所は四箇所だが、＊1冷「夜の」の欠脱、＊2冷「ありと」、＊8冷「は」は、いずれも時雨亭文庫本の誤写であろう。＊4冷「の」脱は意図的な無表記か。＊6の若「こと」と冷「と」はいず

れも意味は通じ、「こ」ないしは「と」の一画目の微妙な筆の運びによる差であろう。＊9及び＊15「なと」、＊9「をは」、＊12「とや」、＊13「にも」といった、意味にそれほど相違がない助詞の異同箇所も一致することからも若狭切と時雨亭文庫本はかなり近い本文を持つ同一系統の写本といってよいであろう。

ところで、若・冷と、内A・松・部・群の江戸期写本・刊本とが対立する比較的大きな異同として、＊1・＊3がある。

＊1花十三番は、「聞え」（若・冷）と逆説の意となる「きこゆれど」（内A他）との差である。左歌「あかなくに花のアタリニ旅ねしつ月たにあれや散まてもみん」（冷）についての評で、判詞前半では「月なくくらきよの花をしも、などかとぞ覚る」（冷）と、月のない闇夜なのに花のもとに旅寝するという構想を批判し、後半の当該箇所では、古今集・春上・41・躬恒「春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるる」を下敷きにしながら、春の夜の闇を無益なものと表現したことに言及している。いずれでも通じるが、直後の右歌評の構文が逆説「あれど」を用いるので、内A他の本の方がより適切であろうか。

＊3は、若・冷の欠脱かと考えられる箇所である。月十二番・右歌「池水の底に紅葉の散しけはやとれる月も赤（ママ）也けり」（冷）についての判詞で、右歌評を次に掲げる（冷による。〔　〕は欠脱箇所で、内Aによって補う）

右は池水の底に紅葉の散しけはといへる、又いかゝ、水にちりしく木の葉は池にも川にも浮ふ物也、是は石なとの心ちやすらん、月もあかきなりけり〔なともをろかにきこゆ、ふるき哥にはとき〳〵よめれ〕と猶か様事はよく用意すへき事也、左は出る月をみるに入事の惜からんとなとかはと覚れは左の勝と申へし

補入箇所は、下句の表現に関わるが、〔　〕を補入しなければ、何を「よく用意すべき」かが具体性に欠け、文意が了解しづらい。若・冷は誤って欠脱したと見るべきであろう。いずれにしても、若・冷は、室町写の同一系統の伝本であると考えられ、現存伝本の中では最も古く重要な異文を持っているが、この系統の親本ないしは祖本段階における欠損をも有しているといえよう。なお時雨亭文庫本には、「判詞本ニ無之」と記して判詞を欠く花十番のような、親本の欠損が明示されている番もある。

おわりに

わずかな例を挙げたに過ぎないが、時雨亭文庫本が良質の本文を持ちながら、欠損も複数あること、及び若狭切と同一系統であることを示し得たかと考える。今後も『重家歌合』は、校訂して用いる必要があることには変わらない。しかし、時雨亭文庫本の独自異文には注目すべきものがあり、前述した以外にも、たとえば三十番（月二番）左歌・下句「千代そふ秋の月をみる哉」（冷）は、内A他「千代てふ秋の月を見てしか」と比較して、第四句は冷が正しいように思われる。また、六十七番（恋十一番）判詞「武昌北山上望夫石其状若人未（愁之余死）」（冷）は、従来の「武昌北山上有望夫石其状如金」（内A・松・群）、「武昌北山上有望夫石状若如人立」（部）と比較して、今後の校訂の参考となろう。

紙数が尽きたが、最後に、比較的文字数の多い欠脱及び誤写がある番とその箇所を挙げておきたい（時雨亭叢書の丁数と行数を示す。〔 〕は欠脱箇所で、内Aにより補い、松による場合はその都度示す）。

○六番（花六番）一八オ一四行

なといひしれる様にて花〔をおもへる心もふかく侍めりかみしもの句のはしめの〕文字同事そ古歌合

○十四番（花十四番）二一オ一三行

字そいますこし思へしやと〔きこゆる右哥すかたことはいとおかしく〕みゆ但み

○十八番（郭公四番）二二ウ一三行

軽く〔にもや右まとろむほとに夢のもりにてなむと〕いへるをかしくはきこゆれと此夢の杜

○廿三番（郭公九番）二四ウ八行・九行

なきとはいかによまれたる〔にかもし無二亦無三なる〕にやあらん郭公はけにさもある事也声ならめ名のる〔なる〕かな

○廿六番（郭公十二番）二五ウ一〇行・一一行

＊傍線部の冷「行つゝ又もきくへくみゆるに」は廿六番右歌下句を誤記。松により、当該箇所を示す。

左哥しのたの杜の忍ねは行つゝ又もきくへくみゆるに紀路行我そと名のる程や（冷）

冷泉家時雨亭文庫蔵『中宮亮重家歌合』の本文について

左の哥しのたのもりのしのひねはなとうためきてきこゆるに木路ゆくわれそとなのれるほとや（松）

○卅三番（月五番）二九オ一行

事にもあらん右左は〔ことはをかさらすして月をおもへる心ふかし右は〕おほつかなき所も

○卅七番（月九番）三〇オ一三行

あはれを先たてゝといへる末はまして〔あわれもいかにとおしはからるゝを〕たゝ影

○卅八番（月十番）三〇ウ一三行

れとたかひにすめる程〔なをこれはおかしかれは心うるはしよりて〕是は持と可申

○卅九番（月十一番）三一オ八行

玉かつらとはをかれたるへしとはみゆ〔れとかつらき山の葛葛（如本）まつはれたらん樛木のしたの〕月にやと

○四十五番（雪三番）三四オ四行

〔されは道もなく雪ふりたらむふる里にむねともと〕こし駒は米へきと也いかゝとは思ふへくもな

○五十四番（雪十二番）三八オ九行

右いとめつらしくみえ侍れ但此山は〔よそにのみ見てややみなむかつらきやたかまの山の〕みねの

○五十六番（雪十四番）三九オ五行

梢にさきそむる枝とつゝける程そいかに〔そや木ゝまかへらるゝ心ちすれと枝よりほかのなと〕

○七十番（恋十四番）四四ウ六行

きぬ〳〵になるころ〔つまなとをおもひいてむことおほえ侍かこのあけぬとゝりの〕なといへる気色

註

（1）当該歌合の名称は、時雨亭文庫本も含めて内題に「中宮亮重家朝臣和歌合」とするものがほとんどである。『新編国歌大観』は「中宮亮重家朝臣家歌合」（内閣文庫201―120外題を参照したか）、『平安

朝歌合大成　増補新訂』は「仁安元年〔八月廿七日以前〕中宮亮重家歌合」、冷泉家時雨亭叢書は「中宮亮重家歌合」の名称を与えている。本稿では、時雨亭叢書の名称に拠った。

（2）時雨亭文庫本は「右哥偏効万葉之古風、頗背中古之妙躰欤」とする。木村尚志「藤原俊成の評語「万葉の古風」について」（『東京大学国文学論集』八号、二〇一三年三月）が俊成判詞の「古風」の使用状況を調査する。時雨亭文庫本により当該例も認めてよいであろう。

（3）『夫木抄』4268・4509・12187詞書に、「長寛二年白川（河）歌合」と見え、4509左注に「此歌判者俊成卿云」として判詞が引用され、4268詞書に「判者俊成卿」とある。『楢葉集』247詞書により、八月十五夜催行と知られる。『歌合大成』は、『夫木抄』『楢葉集』『林葉集』『頼政集』『実定集』『実家集』から計九首を拾遺している。

（4）『住吉社歌合』の伝寂蓮筆本、通村筆本の本文については、拙稿「『嘉応二年十月九日住吉社歌合』伝本と本文考」（二〇一四年、大取一馬編『日本文学とその周辺』、思文閣出版）参照。

（5）俊成自筆本は、前田家尊経閣蔵（尊経閣叢刊に複製がある）。実房筆本は、東京大学史料編纂所蔵。『歌合大成』及び大日本古記録『愚昧記下』に翻字がある。

（6）冷泉家時雨亭叢書95『歌林良材集・歌合集　続』（朝日新聞社、二〇一六年）所収。袋綴、一冊。縦二六・〇センチ、横二一・二センチ。『法住寺殿歌合　玄就筆本』（『建春門院北面歌合』）と合綴されている。本文・表紙共紙。全丁数四八丁。墨付四五丁。奥書「文明十三年三月中旬比早〃／写之畢極〃可企清書者也／右筆玄就入道／行年七十歳」。なお同書解題参照（稿者執筆）。本稿における時雨亭文庫本の本文は同書影印による。

冷泉家時雨亭文庫蔵『中宮亮重家歌合』の本文について

（7）『歌合大成』三六一「本文研究」2170頁参照。なお、同書「本文校異」は、内Aを底本に、内B・彰・部・群により校合している。また、「宮内庁書陵部本は、独自誤謬の甚だしい本であるので、校異には参加せしめなかった」と述べるが、この本が書Aなのか書Bなのかは判断できない。

　また、『新編国歌大観』の当該歌合解題も「近世における伝写本（完本）としては、内閣文庫本・同文庫昌平学問所本・彰考館本・宮内庁書陵部本・松平文庫本等があり、板本としては歌合部類本と群書類従本がある。みな同系統の伝本である」と指摘する（谷山茂執筆）。

（8）岩波文庫『歌合集』（一九三八年、峯岸義秋）に『重家歌合』が所収されるが、解題に「群書類従本を底本とし、歌合部類本を以て校合した」（17頁）とある。

（9）谷山茂著作集一『幽玄』（一九八二年、角川書店）「鎌倉時代における幽玄」72頁、田中裕『中世文学論研究』（一九六九年、塙書房）第一章第二節「幽玄の批判」、久保田淳「幽玄とその周辺」（一九八四年、『講座日本思想』東京大学出版会→一九九三年、『中世和歌史の研究』明治書院）、山本一「非秀歌に対する「幽玄」の批評機能―『永万二年重家家歌合』など―」（『北陸古典研究』四号、一九八九年九月→『藤原俊成　思索する歌びと』（二〇一四年、三弥井書店）第Ⅱ部第九章に改稿して所収）。以下、谷山・久保田・山本論の引用はいずれも著書による。

　他に、武田元治『重家朝臣歌合全釈』（二〇〇三年、風間書房）がある。同書は、『新編国歌大観』により「通釈」「語釈」を示すが、特に本文異同と解釈との連動に注意するものではないので、本論では触れなかった。

（10）内A「かし」は諸本すべて「よし」で、内Aの誤写。

（11）花二番の異同は、①～⑪以外に次のものがある。部・群は意図的な校訂の可能性もあろう。また、冷はいずれも独自異文である。

・ことなれと―ことなれは（内B・高・彰）
・うみ川を―海川をも（冷）
・古郷のとく―古郷のと（部・群）
・落不落―散ちらす（部・群）
・心し―心は（書A・部・群）
・ふかゝらすや―ふかゝらんやと（部・群）
・すみかにはせめと―すみかにせんと（冷）
・ほとも―ほと（部・群）
・哥のさま―哥さまの（冷）、哥さま（書A）

（12）注（9）谷山著72・73頁、田中著84頁参照。

（13）注（9）久保田著248頁、山本著188～190頁参照。

（14）注（9）谷山著76頁参照。また、岡崎義恵「幽玄調といふこと」（『美の伝統』、一九四〇年、弘文堂書房）に、「幽玄調」では解し難く、新校群書類従に「調（イ詞）」とある異文表記を採用した方が「意味が明確」との指摘がある。

（15）注（9）久保田著248・249頁、山本著186頁参照。

（16）注（9）田中著84頁参照。

（17）注（9）久保田著250頁参照。

（18）注（9）山本著193頁参照。